

第3章

ひととまちとのいい関係

女性が動くとき 世間が変わる

●緑区／大熊生活改善グループ

働くだけの人生からの脱皮

「農家の嫁は、家事、育児に農作業と、一日のすべてが働くことだけ。とにかくたたくさん動けばいいと、本人もまわりも思っていたんです」

緑区大熊で農業を営む角田良子さん(45)は、結婚して福井から横浜に移ってきた当時をこうふり返る。話し相手もなく、ただ働く毎日。そんな角田さんに「一緒に遊びましょ」と声をかけたのが、近くに住む平野フキさん(50)。農家生活の近代化は女性たちの手と、昭和四十一年に大熊生活改善グループを結成し、さまざまな生活改善に取り組んでいる地域のリーダーである。

いま横浜の農業は、農家戸数約六千戸。一万三千人弱の農業従事者が、市民に新鮮で安全な農産物を供給している。うち六割

が女性。フキさんたちもその一人だ。

いまこそ農業主体者として女性も経営に参加し、ゆとりのある生活を送れるようになったが、ほんの少し前までは、単なる労働力としてしか扱われない時代があった。フキさんが結婚して同居した家族は一人。洗濯機も掃除機もガスもない時代のこと。家族の世話と農作業に朝から晩まで働きづめで、新聞を読むひまもない。

そんな日々にあせりを感じていたある日、生活改良普及員に誘われて行った生活改善グループのリーダー研修会で、家事労働の合理化によって自分の時間を生み出し、趣味や学習の機会を持つていきいきと暮らしている先輩農家女性の存在を知った。フキさんは、さっそくグループづくりに奔走する。

「働くだけの人生はいやだったのね」と柔らかい笑顔で語るフキさん。以来二十五



仲間たちと意欲的な人生を送るために情熱を燃やす、生活改善グループのメンバーたち

年、一人の仲間が、あるときは考え、学び、あるときは楽しりと、生活の幅を広げるための努力を重ねてきた。

「働くときは一所懸命働き、遊ぶときは遊ぶ。大いに人生を楽しむのが私たちのやりかたなのよ」（フキさん）と。

変わる市民の労働観

いま勤勉は美德という価値観がゆらいでいる。労働時間を短縮し、生活にゆとりを持つとうとする機運が高まり、労働の質が問

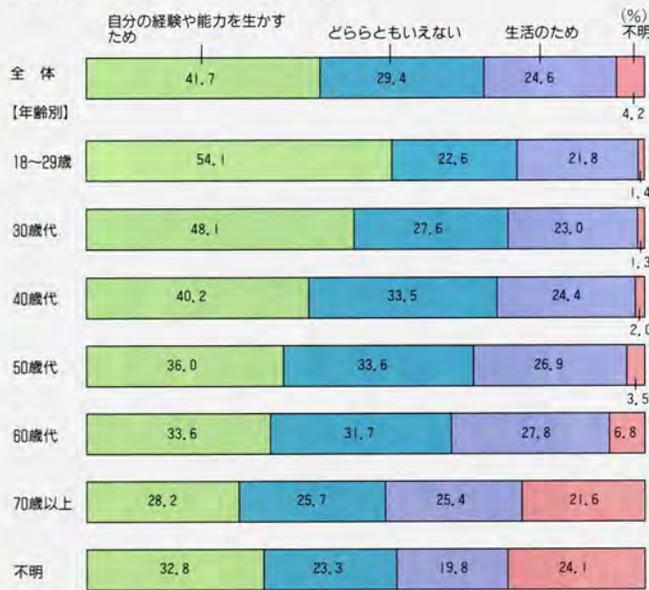


いつも主婦らでにぎわう「大熊にここ市」。農家と消費者の交流の場になっている



生活改善グループの中心となって活躍している平野フキさん（右）と平野節子さん

●2010年頃の暮らしのなかで、仕事に求めること



(よこはま3万人アンケート・平成4年)

い直される時代になってきた。とりわけ若い世代には、仕事より個人の生活を大切にしたいと考える人が増えている。

「市民生活行動調査」でも、「仕事より個人の生活を重視したい」人の割合は、二十代男性で約八割。年代が上がるにつれその割合は減るが、五十代男性で逆転がみられるものの、全体として生活重視派が優勢を占めた。一方、「仕事は収入を得るための手段と割り切っている」人は意外に少なく、男女ともに約六割の人が「そうは思わない」と答えている。女性の方がその率が高いのは、それだけ働くことの目的が明確なのだろう。いずれにせよ、個人生活を大事にしながらも、仕事を自己実現の場としている市民が多いようだ。

の過程で、次第に農業の面白さ、農家生活の可能性に気づくようになる。はじめは、子どもの弁当の貧弱なおかずの改善から始めた活動は、やがて自分たちの食生活の見直しへと進んでいった。当時、市場に出すため同じものばかり作る農家の畑はバラエティーに乏しく、農家なのにスーパーで野菜を買うという事態が日常化していた。そこで自分たちで共同で苗を育て、さまざまな野菜を作ったり、加工品を手作りしたりして、できるだけ自給自足の生活を心掛けるようにした。やがてグループは、自分たちの活動を地域へ拡大。みんなで野菜や手作り食品をもちより、週二回の青空市を始める。いまでは、市の助成を受けて雨の日でも開けるようテント張りになり、名前も「大熊にここ市」となった。それま

で旧住民と新住民との交流はほとんどなかったが、にここ市を媒介に近所づきあいが始まっている。「直売を始めてから、栽培方法を工夫したり、新しい野菜に挑戦してみたりと、仕事に変化が出て面白くなりました。地域の人たちに自分の作った野菜がおいしいと喜んでもらえるのは、何よりうれしいですね」という角田さんたちは、その輪を港北ニュータウンまで広げている。環境問題にも敏感になり、低農薬栽培を実践。廃油石鹸をつくったり、ポリ袋を減らすために折り畳み式の買い物袋を開発したりして、世間がエコロジーをはやす前から、消費者意識の啓発にも努めた。最初は冷やかかだった周囲の目も、次第に変わっていく。自分たちの活動が社会につながっていく手応えに、メンバーの意気は上がる

ばかりのようだ。

横浜市の農地面積は市域全体の二割を占める。農地には、食料生産の場のほか、緑地としての価値やレクリエーション、教育の場としての役割もあり、うるおいのある都市空間実現のため、市では「農あるまちづくり」を進めている。

しかし、都市の中で農業を続けていくことは難しい。先行きの不透明感が後継者難を深刻化させている現実に対し、「これからの農家は給料制にし、休日を決めて生活にメリハリをつけ、後継者のやる気を引き出すことが大事ね」というのは、メンバーの一人、平野節子さん(64)。活動で得たものを、後継者育成に生かしている。

労働も遊びも等価に楽しんでいる大熊の女性たち。「人間は働くだけでなく、外で遊んだり、勉強したり、仲間をつくったり、そうやって生活を充実していくことが大切だと思っんです」という角田さんの言葉は、すべての働く市民にとっても大切な視点ではないだろうか。

いま、大熊では、次の世代の女性たちが、母たちに負けじと自分たちのグループをつくって活動を始めている。ちょうど育児の真っ最中の彼女たち。「農家は家庭も仕事も共同経営。だから男たちも家事を分担すべきじゃないかしら」と母たちの世代ではできなかった本格的な生活改善に乗り出している。「ただ働くだけ」の母の時代は、確実に過去のものになりつつあるようだ。

第3章

ひととまちとのいい関係

自然と遊ぶ、 身体で学ぶ

●緑区／三保小学校
三保念珠坂公園活用委員会



市長への手紙

平成元年六月、一通の手紙が市長のもとに届いた。

「横浜市長様 子どもたちのために、河川と周囲の森が一体となった、自然の残る公園をつくってください」

差し出し人は、緑区にある三保小学校の先生と子どもたち。身近な川の河川改修計画に参画した子どもたちが、それに続く公園整備計画にも



子どもたちの手でヤゴを放流。自然の“暮さ”を肌で感じ取る

自分たちの声を反映させたいと願って上げた声である。

緑に対する市民の意識を「市民生活行動調査」でみると、「住みよい横浜にしたい」のために充実させたい点として「自然が豊富でたくさんあること」をあげている人が一四・〇％。さらに「次の世代に伝えたい横浜の姿」でもっとも多かったのが、「水と緑と豊かな潤いのある街(四三・二%)」であった。子どもたちにとっても、その願いはさらに強い。彼らの「希望する横浜の姿」の第一位は「緑がたくさんある町」がトップで、全体の四八・一%にも達している。市街化が進む中で、日々緑が減少していくようすを目の当たりにしている市民にとって、身近な緑地の保全は大きな願いといえる。

その緑は、あまりに整然としすぎたものであってはならない。人間も自然の一部で

あることを理解するには、自然の生態系を体験できる環境がなにより大事である。市長への手紙には、そんな大人と子どもたちの切実な思いが込められていたのだ。

水と緑が一体となった公園を

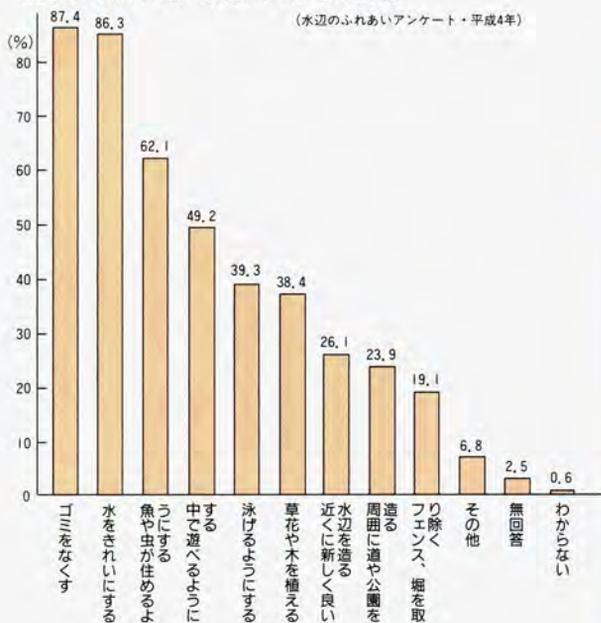
横浜の大規模な緑の拠点は、いま市内に七カ所残っている。そのひとつ、三保・新治地区は横浜線十日市場駅にほど近く、農地と林地がよく残った、横浜の原風景をどめる地域である。その谷戸を流れる梅田川は、鶴見川水系では唯一水質がきれいと言われている川。

その梅田川で、洪水対策のための河川改修が始まることになった。梅田川では周辺の豊かな自然環境を最大限に生かした改修を行いたいと、平成元年、市の下水道局は「梅田川流域ワークショップ」を計画。地元の三保小学校、新治小学校、十日市場中学校の児童・生徒二二六人に、遊び場マップ、生き物マップづくりを依頼。子どもたちの目を通しての、梅田川流域の環境点検を行ったのである。

その結果、水辺にはサワガニをはじめ、ゲンジボタル、カワトンボなど、清流を好む生き物が現在も棲息していることがわかった。

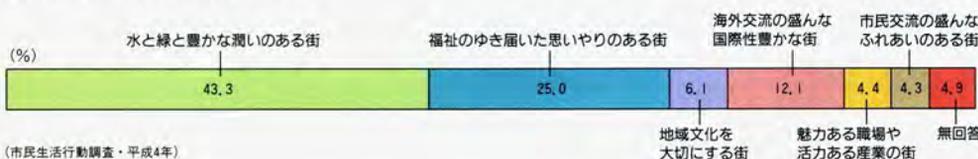
この調査をもとに、子どもたちは理想の川をイメージしてゆく。「水がきれい魚が泳いでいる川」「コンクリートにすると生き物がいなくなるから、道はそのまま土にしておく……」。

●子どもたちの望んでいる水辺環境
水辺がどのように変わればよいですか（複数回答）



水と緑が一体となった三保念珠坂公園。子どもたちの自然に対する理想が随所に生かされている

●次の世代に伝えたい将来の横浜の姿



この理想にそって
梅田川は、護岸に玉
石を用い、土手には
野草を植え、さらに
水域の生き物のため
に河原や瀬・淵をも
うけ、魚が遡上でき
るように改修された。

「子どもたちの要望が生かされた公園で
すから、学校としても積極的に活用してい
こう」ということになって」と語るのは、三
保小野鳥クラブを指導する渋谷京子先生。
地の利を生かした自然教育に力を入れてい
る先生だ。そこで、三保小学校では渡辺宏
校長をリーダーに「三保念珠坂公園活用委
員会」を組織。子どもたちの手で、「どん
ぐり自然公園」というニックネームやシン
ボルマークを決め、公園の緑や生き物を守
るため、学年ごとにテーマを設定して行事
を行っている。「一年生 春の遠足」「二
年生 生活科の学習」「三年生 メダカの
放流」「四年生 ヒガンバナの植樹」「五
年生 ヤゴの放流」「六年生 ドングリの
植樹」。

声を出していくのは市民

同じ頃、隣接する三保念珠坂公園の整備も
計画されていた。この公園から川には直接
降りられない。それに気づいた三保小の子
どもたちは、川にも林にも出入りできる公
園をつくってほしいと、市長に冒頭のよう
な手紙を出すことにしたのだ。この手紙を
受けて、今度は緑政局が「三保念珠坂公園
ワークショップ」を計画。同じ年に、三保
小学校の生徒四〇人によるワークショップ
が実施された。そして、みんなの理想とす
る、遊具などの設備は最小限におさえた、
できるだけ自然の状態を残した公園づくり
がめざされる。こうして、水と緑が一体と
なった公園は平成四年四月にオープンした。

「環境整備は行政がやってくれるものと
いう意識がみんな強いけど、公園づくりに
参加して、自分たちが住む地域は自分たち
でつくっていくものだということがよくわ
かりました。よりよい環境づくりのために
声を出していくのは、市民の責任なんです
ね」。

緑豊かなまちづくりに必要なこと、それ
はこの渋谷先生の言葉につきるのではない
だろうか。

もちろん、こうした行事に限らず、生活
科や「ゆとりの時間」などでも公園は活用
されている。川で遊んだことのなかった子
どもは、川をこわがらなくなった。バツタ
やカブトムシにさわれなかった子どもも、
平気で一緒に遊べるようになった。

「公園にボールを持ってきて『きょうは、
どんな遊びをしてもいいのよ』といって放
っておくと、最初はドッジボールをしてい
る子どもも、最後は川に入って全員で水遊
びをしているんですね。それに教室や校庭
では『先生、あそび』と甘えてくる子ども
も、公園では自然と遊ぶのに夢中で、私の
存在なんて眼中にないみたいなんですよ」
と渋谷先生。

市街化の進むまちの中で、まとまった緑
を残すことは難しい。それだからこそ、公
園や河川を積極的にまちづくりに組み入れ、
日常的に自然とふれあう場をつくり出して
いくことが必要となる。そのためには、市
民と行政が手をたずさえ、身近な自然環境
を保持していく努力がいま求められている
のだ。